

〔要旨〕

## 卑賤の実存

——キルケゴールとキユニコス主義——

本論文は、キルケゴールが提示した卑賤の実存論について、キユニコス主義と比較することで、新たな角度から検討を加えようとするものである。キルケゴールは、新約聖書に書かれた貧しく卑しく生きて死んだキリストに、キリスト教を信じる者が倣うべき模範を見出した。他方、キリスト教が成立する以前、キユニコス主義の哲学者たちもまた、卑賤の実存を高く評価していた。ことにディオゲネスは、社会的な規範やモラルに合致して多くの人々と同じような仕方では生きていくのではなく、むしろ自然の必要に合った最小限のもので生きていくことを理想とし、これを哲学の実践ないし現実化と考えた。

キルケゴールとキユニコス主義の両者において、卑賤の実存は社会的行為として理解されている。それは、彼らを取りまく他者ないし社会に対してポレミカルに働きかけるものとして構想されていた。両者はともに、社会のマジヨリテイが真理とはかけ離れた生き方をしていくことを、真理にかなった生き方をして見せることによって示そうとするのである。

キユニコス主義の卑賤と比較することで明瞭になるのは、キルケゴールの卑賤が彼岸にいる神、およびそれが受肉したキリストに対する信仰を経由することによってある曲折を経ていることである。ディオゲネスにとって卑賤の実存は、端的に自然のうちで達成される理想的な生き方であったのに対し、キルケゴールの卑賤理解を規定しているのは聖書にあるキリストの物語であった。キリストは、

神の愛をこの世で実践にしたにもかかわらず／実践したがゆえに、神の愛を解さぬこの世によって憎まれ殺されるに至った、という点をキルケゴールは強調する。キルケゴールにとって卑賤の実存は、単に貧しく「生きる」ことではなく、他者たちによって迫害を受けることや殉教に追い込まれることをも含意していた。キルケゴールにおいては、キユニコス主義が先駆的に行なっていた卑賤の実存の先鋭化が見出される。

須藤 孝也